

上郡町の偉人

「鵬程万里」第三十七回 中川由香

大鳥圭介

日本人移民排斥。圭介の提言と現代への示唆



国内の労働者不足より、今年四月から介護、農業、建設等含む分野での外国人の在留資格が新設になります。かつて日本人も職を求め、移民として他国へ赴きました。日露戦争後の明治四十年、サンフランシスコでも移民日本人が増加します。日本人雑誌「宇宙」も発刊されました。この二巻五号に圭介は「日米間の時局に就いて」を寄稿しています。

まず圭介は、日米友誼の原点として「嘉平元年の黒船来航以来、米政府の思惑は、自国の商売拡張だけではなく、日本が鎖国したままでは自滅すると心配したことにあった」と述べます。朝廷を憚り開港を先延ばしする幕府に対し、当時の米国公使ハリスの行動は公平で、鎖国を解かなければ日本は兵力で倒されると、辛抱と誠意を以て幕府に説き続けました。一方、「もし開国したのが米国ではなく英国だったなら、日本はアヘン戦争後の清国の二の舞にされ、過大な要求を突きつけられ

権利利益を奪われただろう。フランスも功名心の強いナポレオンが覇を唱え、日本の不利になっただろう」と記します。当時本邦と英国は、日英同盟で強い結びつきを有していました。また圭介自身は幕末にフランス人から陸軍兵制と士卒養成の訓練を受けた恩があります。対して圭介の二国への視点は冷静です。

その米国で日本人の排斥運動として、一九〇七年、サンフランシスコ反日暴動で多数の日本人が殺傷されます。日本人は勤勉で多くの農地を開拓し、地元民の嫉妬と恐れを感じが向けられました。圭介の論考はその直後のもので、暴行事件は言語に耐えない非行と米人を非難します。一方で「安い賃金で満足する日本の労働者が米人の職業を奪った。カリフォルニア当局の者の権勢維持や議員の選挙の都合上、白人労働者を守る為に、邦人を排斥した。そして日本移民の中には、教養も学問もなく現地の者に疎まれる者がいるの

も一因である」としました。メキシコの日本人移民監督者からも、道徳も分別も無く逃げ出す者が居る話を聞いており「邦人の欠点を云々することは決して本意ではないが、同胞の反省を求めたい」と圭介は苦言します。

そして圭介は、開国以来、日米両国は無二の、最も親密なる友人であると読者に思い出させます。米国民の一部の者の非理不法の行為と日本人排斥の声を断つために、圭介は以下三点を提言しています。

一、移民の教育を進め、道徳と分別を高めること。二、移民数を増やし利益を出すことのみを良しとする本邦の移民会社の主義を改めること。三、移民は、数年滞在して小金が貯まれば本国へ帰るのではなく、永久に現地に帰化すること。

圭介は米人の暴動を非難しつつも、日本人排斥は移民開始時より生じており、根本的に絶つには日本人が改めるしかない、現実的です。翌一九〇八年「日米紳士協定」が結ばれ、日本は移民を商人や学生など認可された少数に制限し、米国は排日的な法律を作らない取り決めを交わしました。一九〇九年には渡

沢栄一を団長とした商業会議所の渡米実業団が訪米し、大統領やエジソン等、各界実力者に面談し、日米関係を改善し民間経済関係を構築しました。それでも残念ながら、その五年後、一九二三年に日本人の土地所有を禁じる土地法、一九二二年には日本人の帰化を禁じ権利を剥奪する排日移民法が制定され、一九二四年には絶対的排日移民法で移民が全面的に禁止されました。移民問題の根の深さを思わされます。

現在、日本の側が、外国人労働者、則ち移民を迎え入れることになります。多数の外国人労働者により、本邦労働者の低賃金と過重労働の固定や、生活習慣の異なる集団の騒音や衛生等の問題が顕在化すれば、日本人からの外国人差別や排斥運動も懸念されます。移民は古今東西で継続する問題です。両国が互いに利し友誼を損ねない為に、奇麗事ではなく、現実的な条件制限を含む法整備と運用が必要で、圭介は「国民の外交」として民間人の一人一人の資性を高める必要を説いていました。圭介が提案した事項は、現在も外国人受入れに有効な示唆を含みます。